

SHINC LUB73

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570

fax/03-3486-1450

URL:<http://www.esna.co.jp>



Moderna 南面全景 撮影:ナカサアンドパートナーズ

今月のトーク/monthly talk

近隣

3月竣工した「Moderna」の建て主Tさんは、もともと板金工場があったこの場所に共同住宅を建てる計画を15年前からお持ちでした。紆余曲折を経て、3人の設計者の中から設計を依頼することになったのが、渡辺真理+木下庸子夫妻の設計組織ADHです。

実は、この場所は港区とは言っても、小さな木造住宅が立ち並び、私道も入り組んだ場所で、いくつかマンションもすでに建っているのですが、近隣の方々への配慮が求められる地域でした。建て主のTさんと弊社も港区区役所の立会いの下、10数回も近隣説明会を開きました。出席される方々の要望を聞き、設計に受け入れられること、工事で配慮することなどは極力対応をしていきました。TV受像の調査と保証、解体建物のアスベスト含有スレート板の手壊しおよび工事前後の影響調査、エアコン室外機の設置場所、建物開口部からの視線を遮るための措置などできる限り行っていきました。中には施工会社の責任範囲とはかけ離れている要望もあったのですが、なんとか竣工させていただくことができました。Tさんにお話を伺いました。

—どのような集合住宅を建てたい、とお考えになっていましたか。
Tさん「住宅設計に経験豊富な設計家による、一般住宅が積み上げられたような集合住宅を考えていました。いわゆる生活感がないデザイナーズマンションではなく、建物全体が一つの大きな家みたいなアパートです。意匠や機能だけでなく、変な流行を追わないもの、10年経つと家賃が取れないような新奇なデザインのものは避けたかったですね。外も内も打ち放しのコンクリートという、刑務所みたいなのもいやだった。結果的に同じように見えるかもしれないけど、キッチンや収納などは使いやすくなっていると思う。妻の意見で、女性の立場も理解して

打ち合わせさせてもらってよかったですよ。」
奥様「渡辺先生も木下先生も引き出しをたくさん持っていて、頭の柔らかい方で助かりました。ご夫婦でやっているのと、多少意見が違うのもいいのかな、と思いました。クリエイティブな部分を私はメリットと感じました。男の先生と所員だけ、というのではなく、木下さんがいらっしゃるのがよかったです。私自身はもっと全体の打ち合わせに参加させていただきたかった。」

—近隣説明会を何度も開きました。

Tさん「近隣に対しては疲れましたね。最終的に会議を一方向的にキャンセルされて、こちらも出る必要を感じなくなったので、その後はちょうどよかったんですけどね。でも完成したのを見てもらえれば、前の工場よりきれいだし、緑も植えているし、隣地に迫っていた方向も開放的になったし、空気の抜けも良くなったと思うんですよ。」

—1階にはお子様のための、ギャラリースペースもあります。

奥様「渡辺さんたちがとても良い場所にギャラリーと工房を持ってきてくれました。子供が過ごす公的施設ではなく、誰か通ってきてもらえるような自由な場所がほしかったんです。若いアーティストの方にギャラリーを使ってもらえるのもいい。町全体のことを考えるということが日本では遅れていると思うんですよ。ほんの10坪20坪の話しかできない。場所をつくっていくことができる強みでやってみたく感じました。建物を建てるということはすごくパワーが必要ですね。」

—どうもありがとうございました。

Moderna (モデルナ) TS集合住宅



機能的で多彩なプランの都市型デザインマンション

白金に立つ賃貸住戸+オーナー宅あわせて19戸の集合住宅。賃貸部分は、ワイドフロントステージ型スタジオタイプ、吹抜を持つL型デュプレックスタイプ、奥行きを大きく取ったフラットタイプなどのバリエーションをもつプランである。

もともと板金工場を営んでいた先代から引き継いだ土地に、賃貸集合住宅を建てるという夢を長年持っていたオーナーは、ご自身がエンジニアである関係で、躯体だけでなく、設備についても研究を重ねられていた。そのため設計者側としては、意匠だけでなく、建物としての性能にも提案を行なった。その結果、外断熱工法や蓄熱効果を利用した温熱設備を実現させることになった。

建物の断熱に関しては、南側と東側の外壁にはアウサレーション式外断熱工法を採用し、北側と西側の外壁には、RC+断熱材+金属板(サビナシルーフ)による外断熱工法を採用している。ボリューム的な威圧感が発生しないよう、隣家側にはより配慮して、白いドライビッドで仕上げ、ほとんど開口部がない方向は対比的に金属板仕上げとした。

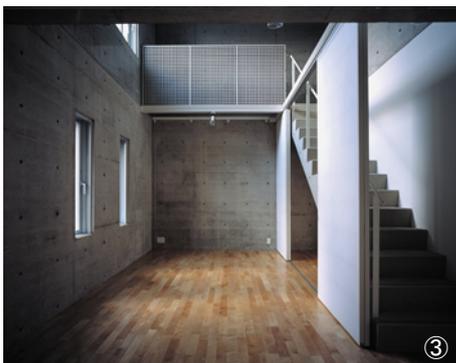
また、近隣は住戸の密集した地域のため、隣地との境界にはアルミの目隠し(5m)を立てたり、サッシ面に外付けブラインド(シェードスクリーン)を設けて、お互いのプライバシーに配慮した計画になっている。

住戸のプランニングではオーナー夫妻と何度も打ち合わせを行なった。各ユニットとも生活のしやすさには配慮している。例えば、玄関からウォークインクローゼットを通るルートを持つ住戸や、キッチンを経由する回遊動線を持つ住戸など女性的な視点も反映されている。共用部分である廊下も普通より広めである。駅から自転車を利用する人が、ハイスペックの自転車を自分の住戸までエレベーターで持って上がり、自宅の入口廻りに置いておくことも想定してみた。

この場所は白金という都心にあり、3階以上は、東京タワーが東側に見える。東側からの眺望と採光には配慮した。北西側には首都高速2号線が走っているため、上階から首都高速を見下ろす光景もまた、都会的で新鮮な景色である。

共用部分というのは、1階には玄関脇にギャラリーなどを設けた。将来的には若いアーティストやデザイナーのためのギャラリーに使ってもらうことも視野に入れている。

この建物の建設にあたっては、近隣住民への説明会が何度も求められたが、辰にはアスベスト含有プレートの除去工事を全て機械作業を用いず実施するなど慎重な対応をさせていただいたので、大きなトラブルもなく、就工できたことには大変感謝している。(渡辺氏+木下氏/ADH 談)



①南西方面全景②賃貸Hタイプ。リビングから右手は玄関・浴室方面へ、左手はキッチンへ、回遊性のあるプランになっている。③賃貸Eタイプ。メゾネットになっていて、右手階段を上がると浴室、寝室へと連なる。バリアフリーの床はエントランス・キッチン部分はタイル、リビング部分はフローリングと分けている。階段横とエントランス部分に引き戸もあるので、リビング部分を別の空間として閉じることも可能。④Hタイプキッチン。⑤建物北面の端にあるメゾネットのDタイプ。螺旋階段で上階のプライベートスペースへ。3方の開口部からの異なった都会の景色が楽しめる。⑥オーナー宅。高い天井のリビング。そびえる太い柱、PSのHR-C が窓際に表情を与える。

所在地：港区
用途：共同住宅
構造：RC造
規模：地上6階 地下1階

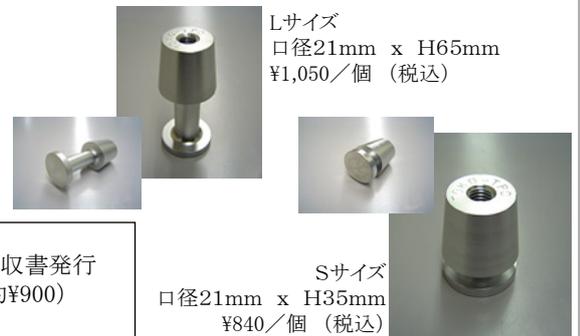
設計：渡辺真理+木下庸子
／設計組織ADH
構造：オーク構造設計
設備：環境エンジニアリング
竣工：2006年3月
撮影：ナカサアンドパートナーズ

ピーコンフックをご存知ですか (コンクリート打ち放し壁面用)

辰では、今月ご紹介したModernaのオーナー、T様の東幸板金工業(株)と、(株)タカギプランニングオフィス共同制作による「ピーコンフック」の販売を行なっています。

コンクリート打ち放し壁面にある、丸い穴(セパレータのネジ穴)を利用して、お好きな場所にお好きな数だけ付けることができます。SサイズとLサイズの2種類があります。一般小売価格よりも安くお買い求めいただけます。

壁面利用の可能性がぐんと広がるこのピーコンフック、この機会にぜひご購入ください。購入方法は下記の通りです。



Lサイズ
口径21mm x H65mm
¥1,050/個 (税込)

Sサイズ
口径21mm x H35mm
¥840/個 (税込)

辰に電話またはFAX
TEL:03-3486-1570
FAX:03-3486-1450

クロネコヤマト
代引配送システム
(コレクトサービス)

料金と品物引き換え・領収書発行
(別途手数料・送料約¥900)



渡辺真理 profile

1977年 京都大学大学院終了 1979年 ハーヴァード大学デザイン学部大学院終了
 1981年 磯崎新アトリエに勤務。ロサンゼルス現代美術館、ブルックリン美術館など担当
 1987年 設計組織ADHを設立。現在同代表。法政大学工学部建築学科教授

木下庸子 profile

1977年 スタンフォード大学卒業 1980年 ハーヴァード大学デザイン学部大学院終了
 1981-84年 内井昭蔵建築設計事務所勤務
 1987年 設計組織ADHを設立。現在同代表
 日本大学生産工学部他講師多数
 2005年より都市再生機構都市デザインチーム チームリーダー
 主な作品
 「湖畔の住宅」、「沼津の住宅」、「NT」、「SK」、「TN」、「NN」、など
 主な受賞
 1988年SDレビュー入選、吉岡賞受賞、2000年日本建築家協会新人賞、2001年日本建築学会作品選奨、2002年日本建築士会連合会優秀賞、2005年JIA環境デザイン賞、など

顔写真撮影：ナカサンドパートナーズ

今月は、モデルナ (TS集合住宅) を設計した、設計組織ADHの代表、渡辺真理、木下庸子夫妻にご登場願います。

—ご夫婦の事務所としてこれまでやってこられていますが、建築家としてのスタートはどういうものでしたか？

渡辺：大学卒業後、京都の大学で教えたり、磯崎アトリエで半年間アルバイトをしてからアメリカへ行き、ハーヴァード大学のデザイン学部大学院に1年間入って、その後アメリカの事務所でも仕事をしました。帰国する頃、磯崎新アトリエに「ロサンゼルス現代美術館」の担当スタッフとして入れていただきました。その後「パラディアム」というNYの巨大なナイトクラブをつくったり、いくつか別のプロジェクトにも参加したりして帰国しました。

木下：私は、もともと子供の頃から、父の仕事の関係で日本とアメリカを行ったり来たりする生活で、ハーヴァードで建築を専攻し、24歳で帰国して、内井昭蔵事務所に入りました。

—渡辺さんとはハーヴァードでお会いになったんですね。

木下：突然、「ハロー、ハウェー」と話しかけてくる人がいるから、「この人はいったい何なのだろう」とびっくりしましたね(笑)。

渡辺：日系の人もあるし、日本人とは思わなかったから。僕は多少なりとも英語に自信があって渡米したんですけどね。最初は大変でした(笑)。

—その後ADHとして事務所を設立されたのは、どういうきっかけだったんですか。

木下：1987年、二人ともちょうど独立した頃ですが、ある仕事を引き受けることになり、二人ではやりきれそうもなかったのが、独立したばかりの牛田英作さんと妹島和世さんと4人でチームを組みました。

渡辺：ところがその仕事は会社組織として契約する必要がでてきたので、僕が代表で会社を作りました。最初は「ad hoc」(そのために特別に作った、という意味の英単語)という名前が背景にあったんです。しかし結局、その仕事は実現しなかったんですね。

—ああ、聞いたことがあります。六本木のディスコ「トゥーリア」で照明落下事故があって、それでプロジェクト自体がなくなってしまったとか…。

渡辺：ええ、そこで<ADH>という会社を引き継いで我々2人で仕事をしていくことになりました。

木下：でも「建築は、一人の作家で作るものではなく、チームで作る—それがいいところ」という姿勢は当初からありました。事務所に入って1年目の人でもいろいろアイデアで提案できるものはある。10年やった人が1年目の人より、いつもいいアイデアを出せる、というものでもない。いろいろなレベルで経験年数のある人の方が長けている部分はもちろんあるが、ルーキーでも参加できることがあります。

—ですから事務所の名前にはあえて個人名でなく、ADH—Architecture Design Harmonics (建築設計和音)として、どの仕事も2人の代表者名でやっています。

渡辺：それは僕たちだけの特徴ではない、われわれの周りにはそういう人はいっぱいいます。ユニットとしてはみかんぐみとか…。時代がそういう方向になっている、ということはあると思いますよ。

—お二人とも一方では、大学の先生という役割をお持ちですね。いろいろな行政のミッションに参加されていたり、社会的な役割を積極的に果たそうとしているようにみえます。

渡辺：意識しているというより、年代がそのように声がかかるようになってきたということはあるですね。時間が許す限り、自分の経験から貢献できることはしたいと考えています。

木下：もちろん作品も重要ですが、アーティストのように作品を見てもらいたい、ということではなく、やはり社会に役に立つことをしていきたいという

スタンスではありません。

大学では、若い人がどうしているのかを知ることが楽しいですね。提案してくる事柄、フレッシュなアイデアに接することは面白く、刺激になりますね。

—お二人で共同作業をする点でのメリット、デメリットは？

木下：やはり別の視点から同じプロジェクトを見ることができるメリットが大きいです。責任は2人とも代表なので感じていますが、常に50、50の分担ではない。状況に応じて一人が多めにやらざるを得ないのですが、そのとき主ではない方が客観的に見ることができる。ちょっと全体から引いたところでクールに判断できる人が同じ事務所内にいる、ということは私にとって心強いですね。

渡辺：磯崎さんのところで働いていたから、一人の建築家のもとのやることの良さそうとやらないやり方があるとは理解しています。チームで仕事をする上では複数の視点の良さを強調しないと。複数の視点とか考え方は重要だし、ダブルチェックをして、建築の質を高めたいことはある。しかしオリジナリティを失わないようにしなくてはならない。組織が大きくなれば、チェック機能は高まるけど、どんどん個性はなくなって、問題点もないが長所もないということになっていきます。だから小さい組織はその存在意義があるように、常に考えています。

木下：デメリットではないが、事務所スタッフは重要事項を我々2人に確認することになっているので、施工現場には決定が遅いという迷惑があるかもしれないですね。工事監視になると、どちらが主体で現場に行くかは決めていきます。一人の発言のあとに、もう一人が違うことを言うということは避けていますね。

—先ほどの学校の先生としてのお立場のように、個人の活動が事務所としての活動の活性化に繋がるということもありますね。

木下：昨年、「都市再生機構」で発足した「都市デザインチーム」のチームリーダーの要請があり、私は現在週3日くらいそちらにも出社しています。仕事の内容は、昨年6月全面施行した「景観法」をふまえて、都市を考える部署として、これからのプロジェクトを進めていくものです。

—ご存知のとおり、今独立行政法人となっている「機構」は大量の賃貸集合住宅を管理しているわけです。基本的には今後新築は行わずに、今までの建物の建て替え利用をしていかななくてはならない。また土地をプロデュースする仕事にシフトしていくことになります。そのためには都市の将来の景観を見据えたビジョンを持って仕事を進めなくてはならないのです。大きな組織なので、仕事の運営上のシステムが完成してしまっていて、量産時代に必要だったルーティンで仕事をこなしていくシステムが、適しなくなってきた。私のような外部の血を入れることも有効ということでしょう。情報発信などの役割も期待されていると感じます。

—後に続く女性建築家の励みになるでしょう。渡辺先生も地方の問題について、雑誌などで発言されている記事を拝見しておりますが…。

渡辺：大学で教え始めてからいろいろと意見を求められますね。サイドエフェクトとして学生には、設計だけでなく「社会に発言しなくてはいけない」ということを伝えたいですね。それぞれの問題は一筋縄ではいかないし、全てが建築で解決できるわけではないのですが、「社会を見る」ことの重要性を教えた。

—また、建築家として、今後は「通りすがりの素人が見ても良さがわかる、何か伝わるものがある建築」を作っていきたいと感じています。

—どうもありがとうございました。



三月二十日(月)
現在、自分が担当しているのは、「田園調布一丁目計画」と「玉川田園調布の家新築工事」の二つだ。現場事務所では、自分の下には若い社員が一人ついている。二人で二現場を監理する。
朝は、「田園調布一丁目計画」に寄る。こちらは一般の住宅の擁壁と駐車場増築工事である。
帰ってきてから「玉川田園調布の家」の現場に入る。六棟の建売だが、RC造の二階建てでボリュームも小さくない。各敷地は約五十坪、建坪は二十五坪、二つは地下一階もある。建売といってもグレードは高い。三棟ずつ二人の設計者が設計を分け、うちが担当するのはA・C・D棟の三棟。別の三棟の工事は、企画する会社の関連会社A社が担当する。うちの設計担当は阿部泰道さんだ。
六棟いっぺんに始まった工事は、関係車両の搬入計画が大変である。A社との打ち合わせが肝心だ。朝礼も一緒に行い、昼礼で翌日の工程の確認をする。一番大切なのは、コンクリートの打設時だ。他の搬入車両は入れなくなるのでこまめに予定を伝えよう。

今日は一階建込み中で、型枠大工と鉄筋屋が入っている。電気設備がその合間に、配線の空配管(CD管)の工事を行う。
昔の一般的な住宅では電気スイッチは各部屋一つだったが、最近はその家も一部屋あたりのスイッチが方々にあるから、配管は多い。

三月二十一日(火 祝)
休日だが、午後会社社に就職希望の知人を連れて行く。



讃井 隆浩
スムーズな段取りで
工期の厳守をめざす

役員も採用のために、全員本社に集まっている。面接などが終わったところで、WBCの中継を皆で見るようになった。盛り上がった。

三月二十二日(水)
今日も型枠、鉄筋屋が入る。古い職方は癖がある。慣れないとうまく使えない。新人にはなかなかわからない部分はある。工夫が必要なのである。

三月二十三日(木)
昨日と同じ工事。内装工事の手

配も行う。業者に見積りを取ったり、サンプルを取ったり、家具のスケッチも家具屋に描いてもらう。正式の図面はまだこないが、決められた予算内にできる最良のことを、あらかじめ検討しておくのだ。一日の工期が遅れると、それだけ次の人に迷惑をかけるので、段取りが命である。
仕上げに入るのは五月末。四月末に打ち終わるコンクリートは一ヶ月の養生が必要なので、型枠をはずすのはその時期だ。それまでいろいろと固めておけることはやっておく。

三月二十四日(金)
「田園調布一丁目計画」の擁壁の見積りを出さないとならない。追加工事だが擁壁の大谷石の再生修復を行うことになった。「薬を浸透させて硬化させる方法」をT社から紹介されたのである。今日業者から見積りが出てくる。
「玉川田園調布」のA棟、世田谷区役所と設計事務所の配筋検査。無事終了。月曜日、いよいよコンクリート打設だ。

1974年生まれ 東京都出身

東京工業専門学校建築工学卒業

趣味: オートバイ、釣り

ただし今は3歳の息子の子育てをエンジョイ中

担当した主な物件(設計者)

登戸集合住宅(野口信彦)

Trevento(谷内田章夫+野口信彦)

Estudio(佐藤尚巳)

池上の家(桑原聡)

駒沢パークサイドテラス(辰)

TOPICS/INFORMATION

新入社員のご紹介

2006年度新入社員が決定しました。左側の作業服の2名は中途採用、スーツ姿の3名は新卒採用の、いずれも若さあふれる面々です。どうぞよろしくお願ひします。



寺井誠治(てらいせいじ)
昭和54年生まれ
北海道出身



花田勝(はなだまさる)
昭和61年生まれ
北海道出身



池山幹人(いけやまみきと)
昭和57年生まれ
静岡県出身



常田俊介(ときだしゅんすけ)
昭和60年生まれ
長野県出身



山本翔吾(やまもとしょうご)
昭和61年生まれ
埼玉県出身

編集後記

・今月の建築家紹介で登場いただいた木下さんのデビュー作は、「湖畔の住宅」というご自身のご両親の家です。海外生活が長いご両親が建てる時に出した設計者への要望が、「愛犬4匹と暮らせる家」というもの。当時の日本ではまだラブラドルレトリバーのような大きな犬と室内で暮らすのは珍しかったそうですが、その言葉に渡辺真理さんは、「なかなかそういう形で暮らし方そのものを提案として出せる施主はいない」と感心したそうです。内外一体になったプランのこの鉄骨造の建物は1989年「吉岡賞(『新建築住宅特集』の新人賞)」を受賞しました。